

郷土かみのかわの歴史・文化財

町指定文化財 農業自得の原本と版木

「農業自得」という本を知っている方は少なくても、江戸時代後期の人物である田村仁左衛門吉茂の名前を知っている方は多いのではないのでしょうか。今回は、この田村仁左衛門吉茂が執筆した農書である、町指定文化財「農業自得の原本と版木」を紹介します。

吉茂は1790（寛政2）年に下蒲生村に生まれました。子供の頃あまり勉強が好きではなかった吉茂でしたが、農業には人一倍取り組みました。そんな吉茂が13歳の頃、人生を大きく変える事件が起きました。吉茂の家の苗代が猪によって踏み荒らされてしまったのです。例年より少ない実りになることを覚悟しながら、残った苗を少しずつ植えて田植えを済ませました。しかし、いざ秋を迎えると、田村家の収穫は他の田よりも多かったのです。吉茂は収穫が増

えたのは、薄植えにしたためだと気づき、これをきつかけに少しでも収穫を高めようと研究をしました。

種の選び方、まく時期、肥料のやり方などについて研究し、やがて40歳の頃には人々に成果を話すようになりました。話に感心した人々は、成果を本にするようすすめ、その集大成として51歳のときに「農業自得」を執筆し、61歳のときに江戸の書店から出版されたのです。

この本が出版される過程で、吉茂は様々な人々に出会っています。幕末の尊王運動に大きな影響を与えた国学者の平田篤胤との出会いでした。篤胤は1841（天保12）年に幕府によって江戸から秋田へ追放されましたが、その途中に秋田藩の飛地であった、仁良川陣屋に立ち寄るとの情報を聞いた吉茂は、調べた事柄を本に写して、篤胤のもとに持

参しました。篤胤は吉茂の本を読むと、添削をした上で「甚ダヨロシキモノ」という感想をもったといわれ、吉茂を大変勇気づけました。

その後吉茂は、1877（明治10）年に亡くなるまで、多くの書物を記していますが、七カ年を一帳に記す耕作帳の作成を重視し、選種・播種の技術体系の確立を目指し、畑作物の合理的な作付け順序についての確かな指摘を行うなど、科学的姿勢で農業技術の改良を行った姿勢は、現在でも高く評価されているのです。



農業自得の原本と版木

明治時代			江戸時代										時代				
1877	1873	1870	1867	1866	1863	1854	1853	1852	1851	1841	1833	1821	1808	1805	1803	1790	西暦
明治10	明治6	明治3	慶応3	慶応2	文久3	安政元	嘉永6	嘉永5	嘉永4	天保12	天保4	文政4	文化5	文化2	享和3	寛政2	
田村吉茂が亡くなる。	田村吉茂が「吉茂遺訓」を著す。	田村吉茂が「農業根元記」 「農家生計根元記」下書を著す。	朝廷が王政復古の大号令を発す。 將軍慶喜が大政奉還する。	田村吉茂が「田村吉茂遺書」を著す。	田村吉茂が「吉茂子孫訓」を著す。	日米和親条約締結。	浦賀沖にペリー率いる東インド艦隊が、 アメリカ大統領の国書をもつて来航。	江戸の書林知新堂より「農業自得」が板行される。	田村吉茂が「農草心得草」を著す。	平田篤胤のもとを訪れる。	この年、大凶作による米価高騰で豪商農への打ちこわしが続発する。	田村吉茂、父吉昌より家督を受け継ぐ。	田村吉茂、算術を学ぶよう奨められるが断る。	幕府、関東取締出役を新設。	田村吉茂、薄植え、薄播きの農法を生み出す契機となる。	田村仁左衛門吉茂、下蒲生村に生まれる。	できごと